

味感ニ於ケル溶液ノ作用

薬学雑誌 明治 32 年度 993 頁(1899)から

薬局方には薬の味が書いてある。なるほど合理的だ。五感のうち味覚、嗅覚だけは外界物を分子レベルで区別するからだ。無味のものでも口中に溶けて加温されれば、僅かでも気体分子が鼻腔に達し、膨大な GPCR 群で識別され化合物特有の「風味」を出す。錬金術に凝ったニュートンをはじめ、機器分析が一般的になる前の時代は、ほとんどの化学者が物をなめていたことは間違いない。べろメーターという言葉聞いたことがあるから、少し前の先輩もなめていたはずだ。

この記事は外国文献紹介(須田)で、Kahlenberg が 15 人に試験してまとめたというもの。「輓今の溶液理論によれば越歴(エレキ)を伝導する溶液の味は、溶在物質のイオンおよび離解せざる成分、両者の味なり(中略)而して酸味なるものは水素イオンに因由するものにして…(略)」以下、水酸基

イオンは「アルカリ性の味」を呈し(どんな味だ!?), 強いものは「甚だ不快なり」という。

Cl は塩様の味とある。Br, I は濃くしないと味がしないようだ。さらに NO_3 (舌の尖または周縁に辛辣にして燃ゆるが如し), SO_4 , 酢酸(少し甘い), Na(僅かに味を有すが記載しがたし), K(著明に苦く不快), Li, Ca, Mg, NH_4 (Ca, Mg 同様苦い), Ag, Hg, と続く。単独イオンを得ようと電気分解して、その液をみんなで舐めているらしい。

味の感想はその通りだろうが解釈など少し怪しいところがある。無理もない。アレニウスが電解質溶液について学位論文にしたのは 1884 年、しかし NaCl のような安定なもの(酸でも熱でもない)ただの水で分離するとは誰も信じなかった。彼は 1903 年にノーベル賞を得たが、塩の解離という概念が受け入れられたのは 1895 年頃だ。

変てこな記事タイトルにも注目したい。イオンも受容体も常識となった現代なら、単純に「イオンの味」! だろう。

小林 力